西南日本の鮮新世以降のテクトニクスとヒマラヤのテクトニクス

Tectonic epochs of Southwest Japan since Pliocene and relation to tectonics in Himalayas

竹村 恵二 [1]
Keiji Takemura[1]

[1] 京大・理・地球熱学研究施設
[1] Beppu Geo. Res. Labo., Grad. Sci., Kyoto Univ.

テクトニクスの画期の地域間同時性・継続性とその因果関係についての議論は重要な地質学的研究課題である．西南日本の鮮新世以降のテクトニクスの画期は，5〜6Ma, 3Ma, 1.0〜1.2Ma(1.5Ma), 0.5Ma,（0.3〜0.2Ma）などの時期が，堆積盆地の発達史や火山活動史からまとめられてきた．これらの一部は，フィリピン海プレートの運動像との関連で読み解かれてきた．西南日本は，フィリピン海プレートの前面に位置する島弧であり，このことはアジア大陸で起こったテクトニクスとの関連でも考察される場所である．特にヒマラヤやチベット高原におけるテクトニクスとどのような関連が想定されるかは興味深い課題である．ヒマラヤ山脈やチベット高原の上昇に関してはモンスーンシステムに関連して11Ma〜8Ma，1Ma の時期の重要性も指摘されている（酒井，2005 など）．西南日本におけるテクトニクスの画期の紹介とともに関連する時代でのヒマラヤやチベット高原でのテクトニクスとの関連について議論を試みる．